② ズーラシアの役割・活動

■紺野康文・河合正嗣・大坂　豊・市川典良

1—よこはま動物園の動物収集
2—動物園の運営管理
Zoo Management Tecinique
3—種の保存
4—環境教育

1—よこはま動物園の動物収集

❶—プロローグ（PROLOGUE）

一九八〇年に新総合動物園構想が打ち出された数年後の一九八二年三月、三種十点の動物で金沢動物園の新大陸一部・北米エリアが開園しました。

その間の動物の収集は、僅か二十九種百点でしたが、開園前までは簡単に入手出来る状況でした。しかし、希少動物の絶滅危惧種は次第に収集が困難となり、最後のクロサイについては、アフリカ区開園（一九八九年）の時には情勢が急激に変化して入手が困難となり、代替えとして入手しやすいシロサイを展示し収集の時期を待ちました。

その後、日立市立かみね動物園から割愛して頂き、クロサイの番（つがい）形成ができたのは四年後のことでした。当初の収集計画を諦めなかったお陰で、現在まで三頭の子供を繁殖させて種の保存に貢献しています。

また、高秀市長は、一九九二年九月に金沢自然公園完成記念式典に出席して最後に、「横浜市では金沢自然公園に引き続き、我が国最大級の動植物園として都筑自然公園（現在、横浜動物の森公園）を建設しています」と挨拶しました。

その時、プロジェクトチームで検討していた、よこはま動物園に展示する動物のリストには、オカピ、インドライオン、金絲猴、ヒヨケザル等の幻の動物がリストアップされており、何れも日本初上陸のもの、技術的にもまだ飼育困難なものや超希少動物の大物ばかりで、本当に収集できるかどうか半信半疑でした。

また、どのような手法で横浜へ誘致するのか興味津々の中で、動物園人たちはその収集の難しさを知りつつも挑戦するつもりで、機会あるごとに横浜市と姉妹・友好都市、姉妹・友好貿易港にある動物園、また国内では収集できない動物を海外から収集するため、直接原産国（政府・動物園）へアプローチしました。

更に世界動物園機構（世界動物園園長会議）、CBSG（保全繁殖専門家集団会議）及びSEAZA（アセアン動物園会議）に積極的に参加して、よこはま動物園・ズーラシアの情報宣伝活動を行うと共に、動物の収集活動のロビー外交を行い相当の効果を上げました。

展示動物（種）の選択と合わせて希少動物の収集には、このような国際動物園会議に参加することが大変重要なことでした。

❷—プロポーザル（PROPOSAL）

世界的に自然環境の破壊により、野生動物は急速に絶滅への道を辿るようになりました。数年前までは、地球の環境が悪くなると私たち人類が住みにくくなると言ってきましたが、今やその環境が私たち人間の行動で破壊していることにふと気づき、地球は唯一つ「かけがいのない地球を大切に」というキャッチフレーズが生まれたのです。

一九九七年に南米のある大きな動物園を訪問した時、動物園の経営の安定を図るため野菜類、牧草類は自給自足しているということで郊外に開発した広大な農場を視察しました。農場に開発されるまではパンパスを有する熱帯森林だったそうですが、農場に行く道すがらあちこちに森林のスプロール現象がみられ、昔は野生動物もたくさん生息していたところです。新しい農場にはスプリンクラーも設置されて、葉ものは青々と茂り生産できる状態でした。畑には昔を忍び新しいアリ塚が幾つも隆起していました。

南アメリカに生息するオオアリクイなどは、野生では一日に一万匹程のアリと小動物を主食として生活しています（動物園では馬肉の挽肉などを代用食として飼育し繁殖にも成功しています）。貧歯目なので粘りけのあ

世界の三大珍獣・オカピ
右が San Diego Zoo 生まれの Kiangaで。
左が Dallas Zoo 生まれの Layla♀

世界の三大珍獣・ジャイアントパンダ

る長い舌にアリを取り巻き食していますが、彼等がこうした生活環境に適した不思議な形態になるまでは、何千年もの歴史がかかっているのです。

いったん、アリ塚が壊されて生息環境が急速に変化しますと、その動物たちは人間のようにその対応を考えることができず、また長い年月をへて環境に適応してきた形態を短期間で変えることもできないのです。これが環境破壊等による動物たちの絶滅への道の一つのプロセスなのです。もう一つは遺伝子の均一性の問題です。

こうした希少動物の絶滅を未然に防止するため、世界中の動物園が手を携えて野生動物たちの「隠れ家」となって保護しているのです。そして、現地の環境が、動物たちが自由に生きてゆける生息環境に復元できれば、動物園で繁殖した動物たちを再び自然界へ復帰させたいものです。

第一次開園区域には哺乳類、鳥類で二十一目六十二種約四百点を飼育展示しています。

グランドオープン時には、世界の動物園でまだ実現されていない動物分類学上の五十四目を収集し、希少動物を中心に百五十種千五百点を展示目標としています。

❸―海外からの動物収集

㋐動物収集の難しさ

一九九九年三月の第一次開園に収集展示する動物について、マーケッテングと今までの経験を活かして次のように収集の難易度別に分類しました。

①市場から購入できるもの

②動物園から繁殖契約で借り受けることができるもの

③野毛山動物園から移転するもの

④海外から収集しなければならないもの

最後の海外からの動物収集に全神経を集中し目的達成に邁進しました。

実質二カ年間で海外からリストアップした動物を収集しなければ、二一世紀にふさわしい動物園とはいえなかったからです。

そのためには、手分けをして海外の動物園や政府に分譲願いの表敬訪問をしました。原産国の動物の収集のため東南アジア、インド、南米に派遣された方は、現地の衛生条件や治安の状態も悪く暴動に遭遇したり、また厳しい日程のため、体調を崩し、ろくに食事もとれず帰国したこともありました。

交渉ごとには必ず現地に精通している日本人か日系人に通訳をお願いしました。じっと聞いていると私たちが話したことを、相手側に通訳しないこともあります。それは現地の情勢やその場の状況を把握して、円滑な交渉を進めるためであったり、また横浜市に有利に導いてくれたこともあったのです。

こうした状況判断ができる通訳こそが、一流の通訳といえるのかもしれません。

㋑動物収集の基本

どこの国でも同じことですが動物収集の基本は、親善大使としての贈りものか、相互の動物交換が最善とされています。

海外からの動物収集については、原産国の最上級の希少動物を要望しますので、日本からはズーラシアでも欲しいようなゴリラ、キリン、サイ、バク等の大型動物を要求されます。ズーラシアは新動物園なので提供できる余剰動物をもっていないため次の条件を付して交渉しました。

横浜市に飼育下で繁殖した健康で繁殖能力のある個体を提供し、長期共同学術研究を行う場合、相手国の希少動物の保護・繁殖・研究の業務を支援することにしました。

㋒ワシントン条約との関係

一寸専門的になりすぎて分かり難いのですが、海外から希少動物を輸入する場合は、商業上の過度の国際取引から絶滅の恐れのある野生動植物を保護するため、必ず国際ルールに基づき通称・ワシントン条約（CITES）の許可書を必要とする事は、誰もが知っていることです。

しかし、その国際ルールの条約の解釈の一部が、日本国とあまり取引のなかった国々は解釈が異なっていたのです。

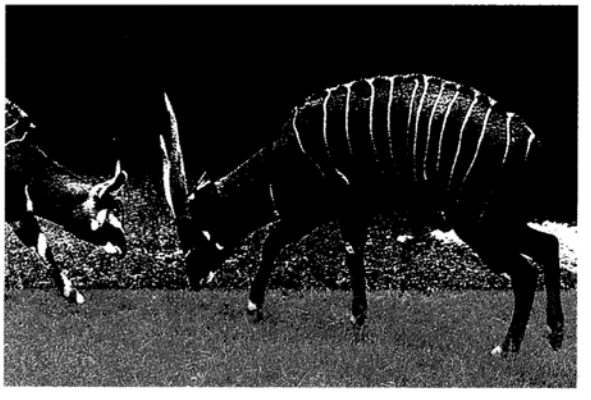
次の通商産業省のワシントン条約I表動物の輸入許可申請に対する見解を理解してもらうのに、長い時間を要しました。

①動物が野生からの捕獲個体、或いはその飼育下繁殖一代目の場合は、輸入許可書を先に申請する。

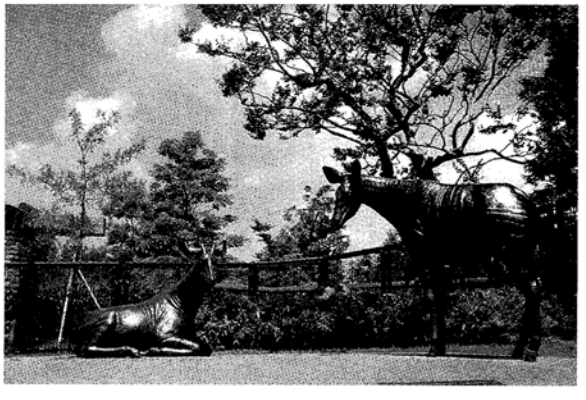
②動物が飼育下繁殖二代目の場合は、輸出者（相手国）が輸出許可書を取得後、輸入許可申請を行う。

ズーラシアでは開園に当たり十二カ国十六都市から二十種八十点の希少動物を収集しています。こうしたことが日本の動物園のどこかで希少動物を輸出入する場合、円滑な取引が行える一助となれば幸いです。

なお、ワシントン条約I表動物とは、絶滅



世界の三大珍獣・ボンゴ



オカピの等身大レプリカ

の恐れのある種で学術研究以外での輸出入が禁止されている動物です。

❹―オカピの誘致経過（PROGRESS）

㋐経緯

動物園の中央アジアの高原が過ぎるとオカピの展示場があります

オカピは、世界の三大珍獣（オカピ、ジャイアントパンダ、ボンゴ）のトップに挙げられるほどの貴重な動物です。どこの動物園でも導入したく検討を重ねてきましたが、何分にも世界の動物園で飼育されている頭数が非常に少なく収集も困難な動物であることから、計画が出ては消え、出ては消えの繰返しでした。

ビロードのような皮毛をした日本画の見返り美人の姿をした幻の動物を飼育展示してみたいということは、動物園人にとって垂涎の的であり、夢の世界なのです。

横浜市とサンディエゴ市は一九五七年に姉妹都市提携をしており、横浜市の姉妹・友好都市の中では、一番長い歴史があります。そして両市にある動物園の間で、姉妹都市提携記念と十周年を記念して動物交換を行っただけで、その後は音信不通となっていました。

ある時、サンディエゴ動物園では、郊外に繁殖センターを兼ねた世界一の動物園・ワイルドアニマルパーク（七百二十八ヘクタール）を建設しているので、相互の動物園の発展のためにもう一度動物交流再開のニュースが入ってきました。

当時、横浜市では金沢動物園を建設しておりまた新動物園の構想もありましたので、姉妹都市提携三十周年から再び動物交換を開始し、新動物園開園の時には是非オカピの提供をお願いしてきました。

横浜市とサンディエゴ市は姉妹都市提携をして四十有余年になりますが、その間、経済、文化、科学と様々な分野で友好親善を深め相互に発展をみました。そうした長い歴史的な背景に基づき、サンディエゴ動物園の尽力によりホワイトオーク保護センター（フロリダ）から一番（ひとつがい）が、開園一年前に送られてきたのです。

到着するまでは紆余曲折があり一九九六年にホワイトオークで開催れたオカピ会議で、一部の動物園から日本へオカピを輸出することは、まだ時期尚早との意見も出されたので、一層飼育管理に万全を期してきました。

北米では飼育希望園館が多数あり、まだ繁殖数に余裕がないので、コンゴ民主共和国・エプールにあるオカピ野生保護センターに寄付をして、入手の順番待ちをしている状況でした。

㋑オカピレプリカの制作

その後、若い一番（ひとつがい・当時二歳）は、日本の気候にも馴れて順調に育ち、動物園の人気ものとなりました。初年度は開園とオカピブームも重なり、一年間で二百三十万余人の来園者を迎えることができました。

そして、オカピは一九〇一年にアフリカのコンゴ民主共和国で発見されて以来、百年目を迎え、この記念すべき年にオカピの臀部の特徴の縞模様を浮き彫りにした等身大のレプリカ（アルミ製鋳物）を制作しました。

また、偶然にレイラに妊娠が確認され、赤ちゃんが無事産まれてくれることを祈念して、七月下旬に除幕式を行い出産を待ち、十一月二十四日に元気な赤ちゃん（雌）が産まれました。子供は順調に育っており、三月二十四日から一般公開し愛称募集を行っています。

❺―動物園への最後の贈りもの

ズーラシアで動物の飼育を始めてから三年余りに過ぎませんが、オカピを始めインドライオン、オオアリクイ、シシオザル、ユーラシアカワウソ、レッサーパンダ、メガネグマ、ベトナムキジ、オオギバト等の希少動物が、続々繁殖して十七種百四点を数え、飼育下の二七％の動物が繁殖に成功しています。

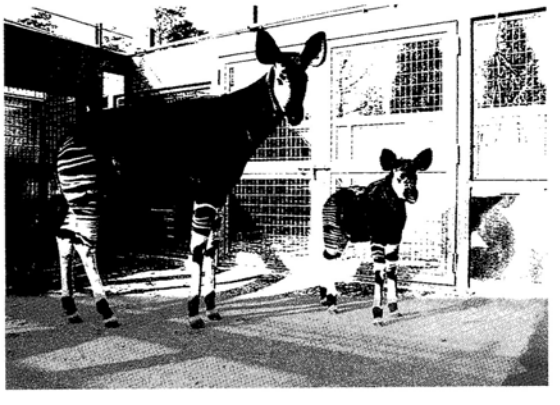
動物たちは創意工夫をして面倒を見てやればやるほど、様々な面で答えてくれます。動物園では、その動物にとって飼育下の生息環境が適しているかどうかの判断は、繁殖という目安を一つの基準としています。

ズーラシアは市民のオアシスとして親しまれ、また自然科学の学習の場あるいは種の保存の場として成果を上げることを期待しています。

現在ズーラシアでは、第二次開園準備のためアフリカゾーンの基盤整備が着々と進められています。

ところで寝耳に水ですが、一月下旬に上野動物園の雄のジャイアントパンダが繁殖計画のため、メキシコの動物園へ貸し出されることになり、東日本では当分の間見ることができなくなり、その留守中にはオカピが展示されると報道されました。

動物園界も手を変え品を変え様変わりしつ



繁殖に成功したオカピの母仔

繁殖に成功したインドライオンの母仔